ベルクソン『物質と記憶』第三章における過去性
――本源の記憶力と過去の記憶力――

宮崎　隆

ベルクソンは『物質と記憶』第三章において、「私の現在 mon présent」について分析した後、断面の描かれていない倒立円錐図形を掲げつつ、一つの課題を示す。「われわれは長い迂回路を経て、こうして出発点に戻る」(MM,167)[1]。「われわれは記憶力の二形態 deux formes de la mémoire を深く区別しつつも、その絆を提示せずにおいた」。「初めに分離しておいたこの二項」は、「この新たな観点」から「内奥において intimement ひとつに接合されることになる」(MM,168)と。記憶力の「二形態」とは「過去の記憶力」と「身体の記憶力」のことである(MM,169)。では、「この新たな観点」とは何であり、いかにして「記憶力の二形態」は「接合」されるのか。小論は『物質と記憶』第三章を中心に、「過去の記憶力」のほうに焦点を絞り、この問題に対する答えを概括的に探る試みである[2]。「私の現在」の分析がベルクソンの論述の転回点となっていることだろう。

一　問題の所在と探究の方向

上述の「出発点」とは、『物質と記憶』第二章に呈示されている第一の仮設を指していると解される。第二章は三つの仮設を巡って展開されていた(cf.MM,82-3)。人格的・個人的記憶と身体的記憶という過去の残存の仕方の二種の区別（第一の仮設）。この二種の記憶に応じて為される想起という再認の二種（第二の仮設）。そして人格的・個人的記憶の「運動への移行」（第三の仮設）。この三つである。第一の仮設において、それぞれの記憶に応じて記憶力の二形態が区別される。しかしまた第三の仮設において、二種の記憶の接続がすでに主張されてもいる。その際の接続地点たる「運動」は、「空間中に将に発生せんとしている当の記憶の可能的行為を素描している」(MM,83)。身体の素描運動である。小論の問題の意味するところをいささかなりとも明確にすべく、第二章を簡単に辿っておこう。

第一の仮設(MM,83-96)に関してベルクソンの用いる例によれば、或る文章を暗誦する際、一回一回の暗誦の練習は独自の朗読の記憶となる。各々が固有の「個物性（個別性） individualité」を有しており、それぞれの「時において占めている場所そのものによって」互いに区別される。特定の「日付」を伴う一回性、個物性がこの人格的・個人的記憶の特徴である。「各々は絶対的に自己充足しており、それが産出されたとおりに存続する」。これに対して、暗誦すべき文章は習慣となって身体に刻み込まれる。人格的・個人的記憶をいくら重ね合わせてもこの身体的記憶を形成することはできない。かくして二種の記憶の「この基本的な区別を極みにまで推し進めるなら、理論的に互いに独立な二つの記憶力を思い描くこともできる」。人格的・個人的記憶にまつわる過去の記憶力は、一回性の出来事を「記憶化された諸々のイマージュ images-souvenirs のかたちで蓄積していることになる」。

したがって第二の仮設(MM,96-107)において再認も二種に区別される。人格的・個人的記憶が「再現された諸々の表象 représentations」というかたちで「過去のイマージュ」として想起されるのに対して、身体的記憶の想起とは習慣として蓄積された行為を実際に成就することである。その想起は「演じられる」。習慣を行為に移すことが身体的記憶による再認である。それゆえ「見たところ優れて記憶力たる」のは過去の記憶力であり(MM,89)、こちらが「真の記憶力」(MM,168)をなす。過去であるということを、過去

性を明かすのは人格的・個人的記憶のほうであって、この記憶と結びつかないかぎり身体的記憶は実は「記憶」の名に値しないからである。身体的記憶のほうは「私の現在」の一部をなす(MM,85, cf.87)。

第三の仮設(MM,107-46)では、二種の記憶の接続が二つの場面において扱われる。第一は「注意的再認」である。その際まず、将に行為を成就せんと身構えている身体がその運動を停止する。「身構え attitude 」の状態が保たれ、それによって行為対象たる知覚対象の同一性が確保される。次いで人格的・個人的記憶が、当の身構えのうちに移行し、それを介して対象のうちに入り込む。こうして同一の知覚対象がいっそう明晰になりつつ、当の対象の個々の細部が判明になる。人格的・個人的記憶が同一の対象の細部を埋めてゆくわけである。第二の場面においてベルクソンは、精神的な障害を二種に区別しつつ、「身構え」の状態を、今度は身体の「将に発生せんとしている運動 mouvements naissants 」たる「運動図式 *schème moteur* 」として解明する。身体の素描運動である。その上で、運動図式との関係において人格的・個人的記憶の想起の過程を以下のように呈示する。人格的・個人的記憶の「現勢化 s'actualiser 」の過程は連続的な「進展 *progrès* 」であって、諸記憶は「事物 *choses* 」ではない。その過程の起点は「純粋記憶 souvenir pur」たる一塊の「観念の雲霧 nébulosité de l'idée 」である。この「雲霧」が「凝固」して「イマージュ化された諸々の記憶 souvenirs-images 」と成り、「運動図式」たる「身構え」のうちに侵入する。もっともこのように諸々のイマージュとなった記憶も「まだ流動的で、最後に凝集して」漸く知覚対象との「融合」が達成される。この最終段階において当のイマージュは「屈曲 réfracter 」して、「判明な知覚」となる。実際ベルクソンにとって、身構えにおける運動図式が可能的ないし潜勢的行為にほかならず、かつ、われわれの日常の知覚対象が当の「可能的な行為を映している」(MM,16)以上、運動図式に侵入した人格的・個人的記憶は知覚に反映されることになる。ただし観念の「雲霧」という言葉によってベルクソンは、第一の仮設において自らの提示した人格的・個人的記憶の特徴に修正を施しているように見える。「雲霧」たる記憶は、はっきりした「個物性」を有していないだろう。それが個物的なのは、すでに「屈曲」を被って、想起されてしまっているからである。記憶の「個物性」は想起の最終段階において初めて見出される。実際ベルクソンは第一の仮設を始めるに当たってこう記していた。朗読の記憶の諸々の段階を「私は再現して自らに表象する」のであって、「次々となされる朗読の〔練習の〕各々がその際、その固有の個物性をもって精神に到来する」(MM,83)と。

かくして「イマージュ化された記憶」は、いまだ「流動的」なまま身構えのうちに侵入する。だからベルクソンは第二章の末尾において、「イマージュ中枢 le centre imaginatif (ou les centres d'images) 」なるものが、身体の成就する諸行為に対して「感覚中枢」と「相称的」な位置関係にあると主張するわけである。すなわち、「判明な知覚は互いに反対方向の二つの流れによって引き起こされる」。一方は物質の側からの「求心的な流れ」であり、他方は純粋記憶の側からの「遠心的な流れ」である(MM,140-6)。なるほどこの主張のおかげで、感覚中枢に物質的対象自体が蓄積されているわけではないのと同じように、イマージュ中枢に純粋記憶が蓄積されているわけではないと考えることができる。この二つの流れという説はしたがって、人格的・個人的記憶の脳内蓄積説を否定する武器にはなる(MM,145)。しかし、この二つの流れが相称的であるかぎり、それぞれが単独で成立しうる。実際第三の仮設においては、両者の「合流する点」(MM,142)は精確に明示されてはいない。第三の仮設における説明はいまだ不十分なのである。では、「記憶力の二形態」の「接合」は、二種の記憶の接続といかなる関係にあるのか。

この問題に答えるには、ベルクソン自身が自らの論の展開について言及している三つの記述を参照する必要がある。その記述がわれわれの辿るべき探究の方向を指し示している。第一の記述は第二の仮設の直前。第二の記述は第三の仮設の末尾。第二・第三の仮設はこの二つの記述の間に挟まれている。そして第三の記述は第四章における簡単な指摘である。

第二の記述(MM,146)から始めよう。第二章末尾でベルクソンはこう語る。

残る問題は、純粋記憶の側の流れが「いかにして〔……〕感覚を発生せしめうるのか、である」と。この流れは、物質の側の流れと同様、「身体によって成就される運動あるいは粗描される運動」を「始めかけつつ、準備する」のでなければならない。「潜勢的感覚 sensation virtuelle 」の「通常の役割」である。翻って言うなら、物質の側の求心的な流れにおいても、「いわゆる感覚中枢の震動」は、「感覚の現実の原因というよりも、感覚の潜在力 puissance を示す印であり、その効力の条件」なのである。したがって「イマージュ中枢」と「感覚中枢」の両者において同じく、「潜勢的感覚」が発生しているはずである。この感覚が「身体に対して運動と身構えを刻印する」。してみると二種の記憶の接続地点は、身体の素描運動そのものというよりも、当の素描運動を発動せしめている「潜勢的感覚」に存する。かくして、第三章の課題の一部はこう書き換えられる。人格的・個人的記憶はいかにして「潜勢的感覚」という接続地点にもたらされるのか、と。

第一の記述(MM,94)に移ろう。ベルクソンは第一の仮設において二種の記憶の相違を際立たせた直後、第三章で答えるべき課題としてすでに三つの問いを呈示していた。それによって、第二・第三の仮設の説明が不十分であることを、ベルクソン自身が予告していたと解される。それは過去の記憶力に関する三つの問いである。

問い1――「当の記憶力は何であるのか ce qu'est cette mémoire 」。

問い2――「それはどこから派生するのか d'où elle dérive 」。

問い3――「それはいかに進行するのか comment elle procède 」。

第二章で問題になっているのが主に「記憶 les souvenirs 」であったのに対して、第三章では「記憶力 la mémoire 」が問題になる。「接合」されるのは二種の記憶のそれぞれに対応する「記憶力の二形態」である。

問い1は、過去の記憶力の本性に関わる。第三章に眼を遣るなら、この問いに対するベルクソンの答えは、「縮約と膨張 contraction et expansion 」という記憶力の「二重の運動であり、この運動をとおして意識は自らの内容が展開するのを再び引き締めたり、拡げたりする resserrer ou élargir le développement 」(MM,185)。意識内容たる諸々の人格的・個人的記憶は、当の意識たる記憶力によって縮約されたり、あるいは膨張したりする。

問い2は、過去の記憶力の出自に関わる。この記憶力の「派生」してくる元があるなら、それはベルクソンが「純粋記憶力」と呼ぶ本源の記憶力であろう。過去の記憶力はそこから特種な一つの「機能」として「派生」する。身体の記憶力に対しては「真の記憶力」たる過去の記憶力も、本源の記憶力に対しては派生的な記憶力にすぎない。われわれは、この派生的記憶力の「再び引き締める」運動の「再び re 」を強く読みたい。第三章に眼を遣るなら、二形態の記憶力は、それぞれが独自の本性を有するというよりむしろ、「二つの機能 deux fonctions 」(MM,169)なのである。してみると第三章の課題は以下のように書き直すことができるのではなかろうか。問題になっているのは、二形態の記憶力をともに本源の記憶力の派生形態として確認し、そうした本源への還元によって当の二つの形態を一つの本源の「記憶力」の下に「接合」することである。この「接合」に成功すれば、二種の記憶の接続が説明の基礎を得る、と。したがってわれわれは、この還元がいかにして行われるのかを探らなくてはならない。なるほどベルクソンは「二つの記憶力」(MM,86,87,89,90,91,94,167,170)という表現も用いている。しかしその際に主張されているのは、二つの記憶力の「区別」である。二種の記憶の「基本的な区別を極みにまで推し進めるなら、理論的に互いに独立な二つの記憶力を思い描くこともできる pourrait 」という条件法の文章は、第三章に眼を遣るなら「衝動の人」と「夢見る人」(MM,170-3)という「二つの極限」(MM,187)にこそ該当する。求心的な物質の側の流れと遠心的な純粋記憶の側の流れとが単独で作用するなら、その際も、それぞれがこの人間の二類型の記憶力の働きを現しているだろう。「事実上は到達されることのない」二つの理念型である(MM,185-7)。二つの記憶力の「独立性」とは「理論的な独立性」にすぎない。「内奥において」文字どおり一つの「記憶力なるもの la mémoire 」が「二つの機能」に分化して、「二つの形態」を取ることになるであろう。

してみると問い3は、一旦分化した「二つの機能」の接合の仕方に関わっているはずである。この文章においては、「進行」せしめるべき事態が省略されているのではなく、文字どおり「記憶力」それ自身の「派生」とその「進行」の仕方が問われているのである。この「進行」が、二種の記憶の接続を可能にしているにちがいない。ベルクソンによれば、たとえば人格的・個人的諸記憶は、発生するとたちまち無意識のうちに沈み込む。したがって、想起のためにはまず過去が再開されなければならない。実際、第三章冒頭で第二章のまとめを呈示した直後、人格的・個人的記憶の想起の過程について改めて第三章の観点から説明する段になると、ベルクソンは新たな主張を持ち出し、人格的・個人的記憶の想起の真の起点を以下のごとくに指し示す。想起のこの連続的進展において「われわれは、ソレ独自ノ現働的な行い un acte *sui generis* について意識するのであって、この現働的行いをとおしてわれわれは現在から離脱して se détacher du présent、まず過去一般 le passé en général のなかに、次いで過去の或る特定の領域に身を移す。[……] しかしわれわれの記憶はいまだ潜勢的な状態のままである。われわれはこのようにして、適切な身構えを取りつつ、もっぱら態勢を整えて当の記憶を受け容れようとする。記憶は、少しずつ雲霧のように現出してきて、それが凝固することになる」(MM,148)と。第三章に入ると、想起の起点は「現在離脱」であり、それによって「過去一般」を開くこと、あるいは再開することである。当の再開は「一挙に」達成される(MM,149-50)。「過去一般」においては、純粋記憶の「個物性」はまったく認められないであろう。これに対して「雲霧」は、第二の起点として「領域」決定の際に漸く姿を現すにすぎない。「現在離脱」が真の起点なら、想起のためには、雲霧を介して現在へ帰還する必要がある。してみると、二種の記憶の接続は、二形態の記憶力がともども分化以前の本源の記憶力に、「私の現在」たる「現在の知覚 perception présente」(MM,152)において作動している記憶力に帰還することによって達成されるのではなかろうか。過去の記憶力に関して言えば、その帰還の際に、人格的・個人的記憶が接続地点たる「潜勢的感覚」にもたらされる。実際第三章ではこう記されている。「連合 *association* なるものは原初の事実ではない。或る乖離 une *dissociation* からわれわれは始めているのである。いかなる記憶の有する他の記憶と集塊を作る傾向も、知覚の分割されざる（統）一性へと精神が自然本性的に帰還 un retour naturel de l'esprit à l'unité indivisée de la perception することによって説明される」(MM,184)と。精神の、記憶力の現在への帰還である。

われわれの参照すべき第三の記述(MM,200)は、いわゆる心身関係に関わる。『物質と記憶』第四章によれば、一方で、形而上学上の問題解明とは反対に、第三章までの分析は「精神生活における身体の役割」の解明に割かれている。第三章までのベルクソンの主導的な観念は「有用性」であり、「われわれの意識が〔有用な〕行為へと方向付けられていることが、見たところわれわれの魂論的生の基本法則である」(cf.MM,9)。「身体の役割」の分析は、形而上学的な思弁の領野に対して、日常的な実践の領野において遂行される。もっとも他方で、「日常の有用な認識の観点と真なる認識の観点」との区別(MM,207)、実践的な認識と思弁的な認識との区別という方途は、「暗黙のうちに」だが、第二・第三章でも用いられてきた(MM,203)。してみると第三章において、上記の三つの問いに対するベルクソンの答えは主に、魂に対する、精神的な本源の記憶力に対する身体の有用な「役割」をもって与えられることだろう。こう言い換えてもよい。一方で、「私の現在」において作動している本源の記憶力の分析は、形而上学的な思弁の領野において遂行される。他方で、本源の記憶力から過去の記憶力を派生せしめる（問い2）のは身体の有用な役割の一つである。この記憶力の本性（問い1）は、当の身体の役割を剥脱すれば現れるにちがいない。現在離脱による過去の再開も、記憶力の現在への帰還も（問い3）、単に人格的・個人的な諸記憶の移行によってではなくて、記憶力に対する身体の役割を念頭において答えるべき課題となる。現在離脱のためには、一時的にせよ派生的記憶力が行為の有用性の頸木を脱する必要がある。現在への帰還のためには、派生的記憶力が本源の記憶力に回帰し、それを介して身体の記憶力との関係を回復する必要がある。

その際に、人格的・個人的記憶は有用性を回復する、と。

二　潜勢的感覚の位置――私の現在と無力の二義

二種の記憶の接続地点たる「潜勢的感覚」の位置を確認しておこう。そもそも『物質と記憶』第三章の課題の解決が可能になるには、一つの分析が必要であった。「私の現在」についての分析である。それに先立ってベルクソンは、連合説のみならず、一般的に哲学史上に見られる「幻想」を指摘する。その幻想によれば、知覚は思弁的であって、「記憶と知覚との間に立てられるのは程度の相違のみである」(MM,151)。これに対してベルクソンは、外部知覚の実践的性格を強調する。外部知覚を支えている「私の現在は、私の利害関心の的であり、私にとって生けるものである。要するに行為へと私を唆すところのものである」。有用な行為は、生きて生活してゆくためにわれわれには欠かすことができない。反対に人格的・個人的記憶のほうは、その本質上、行為の「対象・目的 objet 」をもはや持たない無用な認識である。「私の過去は本質的に無力である」(MM,152)。ベルクソンにとって「無力」とは「無用性」を意味する。人格的・個人的「記憶は、それが無用であり続けるかぎり、無力」である。したがって、「根元的に無力」な純粋記憶は、その無用性のゆえに、生き続けるためにはむしろ意識に現れないほうが得策なのである。ベルクソンの謂う無意識とは「実践的意識 conscience pratique 」の否定にほかならない。「純粋記憶」が純粋なのは、「感覚とのいかなる混合からも純粋なままに留まり、現在との繋がりがない」からである(MM,156-7,103,197, ES,132)。人格的・個人的記憶の想起とはしたがって、当の記憶が「感覚」に対して、「現在」に対して往還することだと考えることもできる。

しかし事態はそれほど単純ではない。なるほど、ベルクソンが「感覚」と「現在」とを等価とみなすことができるのは、「私の現在」が「感覚＝運動的」だからである。しかし、その場合の「感覚」とは「情感的感覚」に見られる「情感」の、なかんずく「痛苦 douleur 」の「無力」(MM,56)を含んでもいる。『物質と記憶』第三章で分析されている「私の現在」については、概ね以下のように解釈することができる。[3]

「私の現在」についてベルクソンは三つの規定を与えている。第一に「或る一定の持続の厚み」を占めて流れている運動する身体を意味しており、「無媒介の過去」と「無媒介の将来」とからなる。現在が「感覚＝運動的」なのは、運動する私の身体における一つの運動性において、前者が「感覚」の面を、後者が「運動」の面を担っているからである。私の運動身体のその運動性は、記憶力の本質たる「縮約 la contraction 」と物質の本質たる「拡がりゆくことそのこと l'extension 」からなる。「純粋記憶力」と「純粋知覚」という形而上学的な「二つの始原」の働きである。「拡がりゆくことそのこと」たる「純粋知覚」が「純粋記憶力」によって「張り緊め la tension 」られて、持続が、運動性が発生する。そうした運動性を、形而上学の領野においてベルクソンは「本体の実在性 la réalité 」と規定する。ベルクソンが第三章において「私の現在」を分析する際、「以下でわれわれが見るように」(MM,153)という表現によって第四章の形而上学を参照するようわれわれを促しつつ述べるところでは、「いかなる感覚も、原初の震動の非常に長い継起の表立った姿」である。たとえば色においては、当の「震動が縮約され」(MM,153 et 227-8)、相互浸透して全体として一つの色合いを具える。生ける存在は、物質からその本質を借り受けつつ、物質の単調なリズムに自らの固有なリズムを刻みつけることによって、自らに固有な生成を獲得する。「無媒介の過去」の発生である。物質の側の「求心的な流れ」は本源の記憶力によって「縮約」されて私の運動身体と成る。「或る一定の持続の厚み」を具えた「われわれの純粋知覚」であり(MM,31,71-2, cf.62,66)、「現在の知覚」である。形而上学的身体とも呼ぶべき運動身体「が表示しているのはしたがって、まさしく私の生成の現勢的な状態であり、私の持続にあって、形成途上のものである」(MM,153-4)。

第二に「私が私の現在と呼ぶもの、それは無媒介の将来に対峙している私の身構えであり、それは差し迫っている私の行為である」(MM,156)。「私の

現在」とは、行為する身体のその将に行為を成就せんとしている「身構え」にほかならない。「私の現在」における「無媒介の将来」も、私の身構えに宿っている。『物質と記憶』のベルクソンは運動の本質たる運動性を、常識においても哲学史上でも是認されてきたような空間内の運動には認めず、自身が『時間と自由』において語ったような「意識状態」の継起と規定するわけでもない(cf.DI,74-5,82-3)。行為への準備状態にある運動身体、「将に発生せんとしている行為」(MM,71,83,86,96,108,168, etc.)にこそ、運動性は見出される。習慣を具えた行為する身体が活性化して、身構えたる運動図式が発動し、かつ、未だ当の行為が成就されていない状態である。それゆえ逆に、行為に際して、当の行為する身体が運動身体の流れに二重の「屈曲」をもたらすことになる。一方で、私の現在に属すかぎりでの「無媒介の将来」に対して、私は「対峙」することなどできない。ゆえに、第二の規定に記されている「無媒介の将来」とは、将に来たらんとしている私の行為のその「差し迫っている」ことと解さなければならない。しかるに、「私の現在」とは、空間内で〈将来〉において成就される行為への身構えの状態である。したがって、私の身体が身構えを取ることによって、「私の現在」の一部たる「無媒介の将来」は、当の身構えが展開されて行為の成就されることになるその〈将来〉に変容して、空間として知覚される。行為身体による第一の「屈曲」効果である。この屈曲効果によって、思弁の領野から日常的な実践の領野が発生する。「身構え」と〈将来〉との間に時間的な隔たりが産み出され、意識は実践的となって、生きて生活してゆくのに必要な仕方で知覚することになる。実践的意識の発生である。いわば縦の運動性の流れが切断されて、実践意識に行為空間が現出する。運動身体における運動面が地平化されて現出する水平な物質世界、日常の知覚世界、「常識 sens commun 」の世界である。この知覚世界の「中心」に、〈ここ〉に位置しているのが「行為中心 centre d'action 」たる行為身体、行為を成就せんと身構えている身体である。他方で、この物質世界においては、意識対象は独立性を有し、当の知覚対象は〈そこ〉において、たとえば湯呑とか机といった「事物」として知覚される。外部知覚の対象は行為身体のせいで、すでに「事物」と成ってしまっている。「私の身体の周囲の諸対象はそれらに対して私の身体の為しうる可能的な行為を映している」(MM,15-6)。第二の「屈曲」効果である。湯呑は、それを掴む手の型を反映している。外部知覚の対象は、はじめから実践的性格をもってわれわれの実践意識に現出する。諸対象は、私の身体がそれらを利用するための「手掛り」を掴むべく、その有用な「側面 côté (face) 」のみを私に提示する。同時に、無用な「側面」は「縮減 diminution 」(MM,32-4,43, cf.EC,211,238)を被って、影となって退く。「私の知覚は、イマージュの綜体のうち、影あるいは反映という仕方で、まさしく私の身体の潜勢的ないし可能的諸行為を素描している」(MM,16, cf.44)。かくして、行為空間と事物という二つの特徴が行為のための図式となる。そうやってわれわれは通常、行為を成就するに到る。運動身体が行為する身体の基層において作動しているわけである。運動身体と行為身体との、「私の現在」と〈ここ〉との綜合である。ゆえに上述のように、行為する身体に宿っている身体的記憶は「私の現在」の一部をなす。

したがって第三に、「私の現在とは私が有する私の身体の意識に存する」(MM,153)とベルクソンが規定する際、当の意識は思弁的意識を指している。ただしベルクソンにとって本源の記憶力たる縮約の記憶力がわれわれの意識の始まりを画す(MM,246)。したがってこの場合、意識は二重の役割を担っている。一方で、縮約の記憶力が、物質の側の流れに抵抗しつつ、当の流れを自らのリズムへと吸収する。「拡がりゆくことそのこと」たる「純粋知覚」と闘い、物質の側の流れのなかでいわば逆流を引き起こして、当の「拡がりゆく」傾向を自らの下に押さえ込む。意識は自らの「現働的な行い」によって、物質の流れを「待機」せしめ、そうやって物質の単調なリズムに対して、生けるリズムを発生せしめる。それは「遅れ」の発生でもある。発生しているのは「無媒介の過去」であり、運動身体それ自体である。だから「無媒介の過去」を「現在の記憶」(ES,137, cf.112-4,119,130-2,135-6)と呼ぶこともできる。さらにまた「私の現在」においては、「無媒介の過去」におけ

る独自の運動のリズムがそれ自体で「将来への方向性」たる「無媒介の将来」を構成しているのだから、「当の運動は感覚に起因せざるをえない」(MM,153)。運動身体は自らの流れのなかで、縮約の記憶力の抵抗において自己関係を結んでいる。他方でしかも、運動身体のこの自己関係において、抵抗や闘いの際に、触発の情感性が意識に出来している。「無媒介の過去」たる感覚が同時に意識的たる所以である。「現在の記憶」においては、記憶たる意識内容と意識との間に隔たりはない。痛苦を原型とする「情感的感覚」の意識である(cf.MM,167)。しかるに、当の原型たる痛苦は、その本質において、「無媒介の過去」を発生せしめる抵抗のその際の触発の意識であるから、「無力」の意識でもある。逆流の抵抗は、将来への方向性とは反対に、過去への方向性を示している。「無媒介の過去」は、それ自体としてはその方向性において「無力」である。いわば縦に下降する知覚の流れのなかで、生のリズムを産み出すのみである。縮約の記憶力にとって、できることといえば抵抗という「無力な努力」だけである。情感的意識は私の「無力」の意識として出来する。それでいてしかも、いかなる情感も「行為の源泉」である(MM,55)。というのも、「遅れ」によって私の運動身体の「無媒介の将来」は独自のリズムを具えるのだから。それゆえ、「情感なしに〔われわれの〕知覚は存在しない」(MM,59)。情感がわれわれの外部知覚を可能にしている。

　してみると、無媒介の過去における「無力」は、単なる私の過去の「無力」とは水準を異にする。前者が形而上学的な無力であるのに対して、後者は実践的な無力である。形而上学的無力とは縮約の「無力な努力」の「無力」であり、それゆえに情感は有用な「行為の源泉」となり、外部知覚を可能にしもする。この無用性たる形而上学的無力は有用性なるものが発生するための条件である。私の運動性を、だから私の行為を発動せしめる無力なのである。形而上学的「無力」は行為に対する実践的な「効力」を具えている。実践的無力のほうは、生きて生活してゆくための現在の「利害関心」の「影」の部分に、いわばその補集合に該当する。行為身体の第二の屈曲効果による「縮減」の結果、無用な部分は知覚から排除される。もし私の可能的行為を反映していない「影」の部分が、無用な「側面」が実践意識に現出すれば、むしろ有用な行為の成就は阻害される。行為身体は、純粋知覚と純粋記憶とに対して同じ効果をもたらす。人格的・個人的記憶が身構えに侵入しようとする際も、身構えが、あるいはそれに従順な実践意識が、無用な記憶の現出を抑止する。行為に「手掛り」を与えない記憶は排除される(MM,162)。逆に言うなら、純粋記憶が「表象として再現」されるには実践的無力を突破する必要がある。第三の仮設よれば、その想起の最終段階においてイマージュは「屈曲」するのであった。

　かくして、物質の側からと純粋記憶の側からの二つの流れの合流点は「無媒介の過去」たる「感覚」に存している。二種の記憶の接続地点である。実際一方で、身構えの意識は情感的意識の一種であり、それはまた、ベルクソンが「イマージュ図式」と規定する「将に発生せんとしている筋肉感覚 sensations musculaires naissantes 」(MM,121,123-4)にほかならない。「運動図式」についての意識である(MM,121)。物質の側の流れにおいて、「潜勢的感覚」の「効力」は、「身体に対して運動と身構えを刻印する」のであった。行為身体は、身体的記憶を演ずるべく身構える。他方で、純粋記憶の側の流れにおいては、たとえば「感覚の〔人格的・個人的〕記憶は」連続的な進展に従って「現勢化」し、遂には「感覚そのものへと繰り入れられる」。したがってその途上で「将に発生せんとしている感覚」と成る(MM,156, cf.141,151)。ただし、記憶の有する「潜勢的感覚」との関係は、「示唆〔＝暗示〕 suggestion を与える催眠術師の役割」に比される(MM,150-1)。その際、潜勢的感覚は、「示唆というソレ独自ノ潜在力 puissance *sui generis* をもって現前する」(EC,133)。いまだ「流動的」な「イマージュ化された記憶」が示唆の働きをもたらしていることだろう。「観念の雲霧」が「生きられうるものとなるには、或る側面から現在の本体の実在性と接触しなければならない。すなわち、段階を経て、縮減 diminution あるいは自ら進展的に縮約することをとおして、いずれが多いか少ないかは措くとして、精神によって再現的に表象されうると同時に身体によって演じられうるのでなければな

らないことになる」(MM,193)。この引用文では、過去の記憶力の「二重の運動」(MM,188)が同時に描かれている。純粋記憶が「縮減」をとおして「精神によって再現的に表象」されるに到る「自転運動」と「縮約」をとおして「身体によって演じ」られるに到る「並進運動」である。自転運動が、実践的無力を乗り越える運動である。並進運動によって「記憶力は、自らその全体を丸々経験の前に赴かせ、そうやって行為を目指して、分割されることなく、多かれ少なかれ縮約する」(MM,188)。過去の記憶力は自ら「縮約」して、潜勢的感覚と成り、演じられるべき行為を示唆する。その際に、当の過去は「私の現在の或る特定の部分 un certaine partie と溶け合う」(MM,156)。人格的・個人的記憶が「私の現在」に、いっそう精確には「無媒介の過去」という部分に接続する(MM,167)。

問題は残る。第一に、「並進運動」は「自転運動」といかなる関係にあるのか。第二に、この二重の運動を行っている過去の記憶力は、本源の記憶力といかなる関係にあるのか。この二つの問題にいささかなりとも答えるために、過去の記憶力の派生の仕方を検討してみよう。第一の記述における問い2に対する答えである。

三　私の現在と記憶の純粋化―倒立T字図形における空間性と過去性

ベルクソンが第三章で「私の現在」について分析するのは、当の現在の実践的有用性と対比しつつ、過去の無用性を強調するためである(MM,152 et 156)。現在と過去との対比は実践の領野における有用性と無用性との対立にほかならない。その際、形而上学的無力のほうは無視されている。しかも上述のように、精確には「私の現在」における「感覚」との、「無媒介の過去」との乖離がベルクソンをして「記憶」を「純粋」と呼ばしめている。「記憶は〔……〕それが無用であり続けるかぎり無力であり、感覚とのいかなる混合からも純粋」なのであった。「純粋記憶力」が「純粋」なのは「純粋知覚」と、したがって知覚の流れそのものと混合していないからである。「純粋記憶」が「純粋」なのは「無媒介の過去」と混合していないからである。「無媒介の過去」たる「感覚」から乖離して、「現在の記憶」は「私の現在」から切り離され、「純粋」化される。「決定的な過去 le passé définitif 」の発生である。過去の記憶力は「決定的な過去において運動する」(MM,168)。かくして、「現存すること exister 」は、実践的に「意識」されることと区別される。「過去は仮説上、存在することを止めたわけだが、それなら当の過去はいかにしてそれ自体で保存されうるのか。そこには文字どおり矛盾があるのではないか――われわれはこう答える。精確にはこの問いは、過去が現存することを止めたのか、あるいはそうではなくて、有用であることを単に止めたにすぎないのかという点に存する、と」(MM,166)。実践的に有用であることを止めれば、過去は現存していても、実践意識には現れない。これがベルクソンの答えである。してみるとこう考えることができる。「無媒介の過去」が二重化して二層に分化する。一方で、有用性なるものを発生せしめる行為身体が介在することによって、実践意識に現出しない「決定的な過去」が発生する。しかし他方で、だからといって「無媒介の過去」は、過去としての現存を止めたわけではない。第一の思弁的で本源的な層において現存し続ける過去が、第二の実践的で派生的な層において、実践意識に現出しない「決定的な過去」に成ったのである、と。

第二の層の発生過程を、倒立T字図形が説明してくれる。ベルクソンによれば、「私が物質的諸対象を知覚するのを止めても、当の対象が現存する」ことを止めるわけではないのと同じように、知覚されなくなった過去も現存し続ける。しかるに、実践的な利害関心に囚われて実践の領野のうちに閉じ込もっている「常識」は、そのように考えない(MM,156-8)。倒立T字図形はそうした常識の考え方を表示している。横線ＡＢの中点Ｉに垂線の足ＣＩを降ろすと、倒立T字図形を得る(MM,159)。横線ＡＢは行為空間を表示しており、Ｉが行為身体の位置する〈ここ〉である。行為空間は、地平的・水平的な物質世界からなる。横線ＡＢは「空間内に同時にあるすべての対象を含んでいる」。これに対して、縦線ＣＩ上には、「継起するわれわれの諸記憶が時間内に段階的に配置されている」。そして点Ｉが「唯一、われわれの意

識に現勢的に与えられている」。知覚世界の地平構造のゆえに、われわれには〈ここ〉からは部屋の外は知覚できないし、その外に在る街路も知覚できない。〈そこ〉に辿り着いて、〈そこ〉が〈ここ〉と成るごとに、新たな〈そこ〉が開けてくる。しかるに常識にとっては、知覚されていない当の物質的対象が「それ自体で」、無意識のまま現存する。物質的「諸対象に関しては、意識の外部の現存は明らかだと思われる」。知覚されずとも、横線ＡＢは全体として現存すると信じる。これに対して、過去は消えて無くなったと考える。縦線ＣＩについては、「現勢的に知覚される現在たるＩのみが唯一、真に現存しているようにわれわれには思われる」。そうした常識の考えが「どこから出来するのか」とベルクソンは問う(MM,158)。常識の幻想の出自を問うわけである。したがってベルクソンの問いは、過去はいかにして「保存」されるのかという方向にはない。そうではなくて、いかにして「決定的な過去」が、記憶の「純粋」性が、純粋な過去性が発生するのかという方向である。「現在の記憶」はいかにして「純粋」な「記憶」と成るのか。その答えが、行為身体の屈曲効果の裏面であり、私の運動身体の運動性に対する行為身体の「役割」の一つである。「時間と空間の二系列の間の根元的区別」という幻想が発生してくる本源には「二重の変換過程 double mouvement」が存している。「いかなる思弁的価値をも欠いた思い込み」の虜になってしまえば、この変換過程をとおして、物質世界には意識と無関係に「客観的現実性」が与えられ、逆に意識からはこの現実性が剥奪される(MM,159)。すなわち、行為身体はその実践的な役割に従って、「無媒介の将来」を空間化しつつ、同時に「無媒介の過去」たる「現在の記憶」を純粋化する。この「変換過程」が「二重」なのは、行為空間を発生せしめる行為身体の第一の屈曲効果が同時に裏面を具えているからである。

倒立Ｔ字図形を利用してなされるベルクソンの説明を確認しておこう。一方の変換過程は、行為身体による「無媒介の将来」の空間化であり、その説明の出発点は、「私の現在」の第二の規定である。すなわち、「無媒介の将来は差し迫っている行為に存する」(MM,159)。第二の規定の文章との微妙な相違が、ベルクソンの論述の動きを物語っている。すなわち、倒立Ｔ字図形において焦点となっているのはもはや「私の現在」たる「身構え」ではなくて、行為の成就されるべき場たる〈将来〉のほうである。当の〈将来〉を行為空間が反映している。第一の屈曲効果である「空間における隔たりは、時間における〔実現されるはずの〕脅威や見込みの近さの度量を示している」。常識にとっては、「身構え」と〈将来〉との時間的な隔たりは、〈ここ〉と〈そこ〉との空間的な隔たりとして表現される。それはまた、行為空間に地平性が残存する所以でもある。地平性が成立するには、空間によって〈将来〉が記号化され、空間は滞留を特性とするにせよ、「当の将来が無際限に流れてゆくはず」だという条件も必要なのである。「空間はわれわれの近い将来の図式」にほかならない(MM,160)。縦の流れの「切断面」を表現している横線ＡＢも、いまだ完全に持続を失ったわけではない。「切断面」は「瞬間も同然 quasi instantané」であるにすぎない(MM,154, cf.234)。日常の知覚世界に存する諸対象はいまだ、空間的な「同時性」と時間的な「段階的配置」とを兼ね備えている(MM,161)。してみると、以下のように考えることができる。点Ｉの下にＤを取って、縦線ＣＩをさらに下方に延長してみよう。今度は十字型の図形を得る。仮に行為空間が反映している〈将来〉だけを思い描くなら、〈将来〉はＤに存する。「私の現在」に宿っている「無媒介の将来」が変容して行為の成就される〈将来〉と成るのであった。われわれには、一つの縦線ＣＤのみが与えられる。つまり、点Ｉにおける「無媒介の将来」が、縦線ＩＤを介して日常の物質世界たる横線ＡＢへと屈曲したのである。ベルクソンが物質的諸対象を結ぶ「鎖」に対して、本来は「われわれの諸記憶も同じ類の鎖を形成している」(MM,162)と主張する所以である。

以上の変換過程の裏面では同時に、記憶の純粋化が発生している。時間と空間とを縦線と横線という異質なものに「区別することは、実践的有用性と生きて生活してゆくのに必要な物質的な欲求とにまったく相関的・相対的」である。行為空間内の諸対象を「現在の実在物にこのようにしてわれわれが格上げ」してしまうなら、「われわれは、そうした物質的な諸対象を拠り所

にしていると感じる。それに対して、反対にその分だけ、過去であるかぎりでのわれわれの諸記憶は、われわれが自らと共に引きずっている死せる自重となる。われわれには、自らに偽ってこの死せる自重を厄介払いした振りをするほうが好ましいのである nous aimons mieux nous feindre débarrassés [de poids morts] 」(MM,160)。「無媒介の将来」を実践の領野へと「格上げ」するなら、それとともに、人格的・個人的諸記憶は無意識の闇に沈み込む。実践意識は、自らに偽って当の記憶を駆逐する。しかるに、今問題になっているのは、人格的・個人的記憶の想起の最終段階ではなくて、その蓄積の初期段階である。「過去であるかぎりでの」諸記憶の発生である。生き続けようという「本能の力のせいで、われわれは自らの前方に無際限に空間を開くわけだが、その同じ本能のせいで、われわれは自らの背後に時間を、それが流れてゆくに従って閉鎖する」(MM,160-1, cf.165)。この「閉鎖」によって「私の現在」における「無媒介の過去」が決定的な過去性を獲得する。第一の屈曲効果の裏面である。形而上学的な思弁の領野から日常的な実践の領野へと「格上げ」される際に、記憶は純粋化し、「純粋記憶」が発生する。

記憶の純粋化は、ベルクソンの以下の記述において確認できる。第一に、『精神エネルギー』所収の論文「現在の記憶と再認擬き」によれば、純粋記憶は現在に始まりを有する。「現在はどの瞬間もその噴出そのものにおいて二重化して、二つの相称的な噴流となる。その一方は過去に向かって沈下し、それに対して他方は将来に向かって躍動する」(ES,131-2, cf.135)。記憶と知覚という二つの「イマージュは一緒に形成される」(ES,119)。純粋記憶は「現在の記憶」に始まりを有する。ただしこの「現在の記憶」をそれとして想起するなら、病的なデジャヴュ現象が発生する。第二に、『物質と記憶』第二章によれば、「逃走的イマージュ image fugitive 」がその「現在の記憶」にほかならない。「逃走的イマージュ」は「夢のイマージュ」の一種であり、その現出も消失も「われわれの意志的な記憶力」に従おうとしない。「一つの綜体の再現表象が、全体を包括する一種の複合的な観念があって、そこにおいては、諸部分は言いようのない感じの（統）一性をもって」いる。しかし、それを想起しようと意志する段になると、それは消失してしまう。「逃走的イマージュ」が再現された表象として実践意識に対して現出するなら、「知的平衡」が崩れて、病的なデジャヴュ現象が発生することだろう(MM,90-4)。[4]

「逃走的イマージュ」の表象としての再現は通常は抑止される。そして第三に、『物質と記憶』第三章に戻るなら、「出来事 événement の記憶が記憶力に刻印される場合、いかなる出来事も、それがいかに単純だと仮定しても、或る一定の時を占めたのである」。諸々の知覚が「一つの分割されざる記憶を形成する」のは「私の現在」においてである。「近い過去の記憶も、さらに比較的遠い記憶さえ」、そうした「決定的な部分」に到るまで「待機」していなければならない(MM,191-2)。一回性の「出来事」の発生である。こうした「出来事」化は、倒立T字図形による説明の最後の部分でも主張されている。その際、過去は「有用であることを止めたにすぎない」という指摘とともに、二つの観点が対比される(MM,166-7)。一方は、現在を「存在するもの」とみなす観点。他方は、「為されて事実と成りつつあるもの *ce qui se fait* 」とみなす観点である。前者は「私の現在」を「数学的な瞬間」と捉える観点である(MM,152)。後者が、現在を出来事化しつつあるもの、事実化しつつあるものと捉える観点である。しかるに「この現在は大部分、無媒介の過去からなる」。「私の現在」における「無媒介の過去」である。この形而上学的な思弁の観点においては、「無媒介の過去」はいまだ純粋な過去と成ってしまってはいない。してみると時が過ぎ去って過去と成るのではない。行為身体の屈曲効果を被って事物化され事実化されなければ、在るのはせいぜい「私の現在」に属す「無媒介の過去」のみである。「無媒介の過去」は実践の領野において一回性の出来事として事実化されることによって無効化され、純粋な過去と成る。現存しつつも、実践的に無意識と成った「現在」にほかならない。第二の屈曲効果もその裏面を具えている。病的なイマージュの再現を防ぐには、過去を「閉鎖」して、「私の現在」から締め出し、事実化して純粋化するのが得策なのである。そうやって「現在の記憶」は「純

粋記憶」と成る。同時に示唆の潜在力も、身構えに対して、行為身体に対して、したがってまた実践意識に対しては、無効化される。実際、「人が日ごろ事実と呼ぶものは、無媒介の直観に現出するような本体の実在性ではない」。「事実」とは「実在する本体を実践上の利害関心に［……］適応させること」で実践的に産出される人工物なのである(MM,203)。かくして実践の領野において、「無媒介の過去」との乖離が生じる。同時に、一回性の「出来事」が発生し、そうやって記憶も個物化して互いに乖離する。「無媒介の過去」における「感情から、全面的に概念化された一般性と明確に知覚された個物性とがともども、乖離 dissociation という途を通って産み出される」(MM,176)。上述のように、「乖離からわれわれは始めているのである」。行為身体の屈曲効果による実践的な領野の発生が、実践的無用性、実践的無力をも産み出したのである。したがって逆に思弁の層において捉えるなら、「無媒介の過去」は純粋化されずに現存し続ける。ベルクソンによれば、それが「性格」である。性格は思弁の領野において「私の現在」に属す。「われわれの性格は、われわれのあらゆる決意に常に現前し、まさにわれわれのあらゆる過去の状態の現勢的な綜合である」(MM,162)。

かくして「無媒介の過去」は屈曲効果によって二層化し、過去は二つの層において残存する。それゆえ「過去の記憶力」はこの二つの層に同時に関わる。一方で、「性格」として「われわれが生きた経験の全体 la totalité de notre expérience vécue 」は残存している(MM,162)。しかも当の「性格」の思弁的「意識への現前は完全である」(MM,163)。「魂論的事実は常に一緒に、分割されざる一つの全体として無媒介の意識に与えられる」(MM,185)。第一の層は、思弁の領野においてあくまでも「私の現在」の一部にとどまる。ただしこの残存はいわば私の過去の「要約」であり、しかも「純粋」な過去ではない。他方で、実践的な有用性なるものを発生せしめる行為身体が介在することによって、意識に現出しない過去が発生する。第二の層における過去である。「われわれの古い諸々の知覚は、互いに判明に区別された個物者とみなされるなら considérées comme des individualités distinctes、全体的に消失してしまった［……］という効果をわれわれに与える」(MM,162)。諸記憶を「個物」的と「みなす」実践意識は、「性格」に現れている私の「全体」的な過去をも見失う。「この全面的な破壊という見かけ apparence［……］は、ただただ現勢的な意識が瞬間ごとに有用なものを受け取り、余分なものを一時的に捨て去ることに起因する」(MM,162)。「個物的」過去は実践的意識に現出しないという意味において実践の領野に属する。実践的無意識である。

四　過去一般の再開と現在への帰還――二つの倒立円錐図形における過去の記憶力と本源の記憶力

われわれの分析が正しいなら、記憶力の二形態が接合されるのは、当の二つの形態がともに「私の現在」から派生しているからである。小論冒頭に引用した「新たな観点」は、「二つの機能」として派生した二形態の記憶力を本源の思弁の領野へと還元することで得られる。実際ベルクソンは、「記憶力の二形態」の「接合」を主張する際、再び思弁の観点に、「私の現在」に立ち返る。一方で、上述のように、行為身体は運動身体と綜合される。倒立円錐図形の頂点Sが表示しているのは、「運動の通過する場」たる運動身体と行為中心たる行為身体とが綜合された「感覚＝運動現象の座」である(MM,169)。〈ここ〉は現在の一部である。したがって他方で「もしわれわれが、われわれの無媒介の過去以外のものをけっして知覚しないなら、もし現在についてのわれわれの意識がすでに記憶力であるなら」、記憶力の二形態は接合される(MM,168)。もし私が実践的な外部知覚を放棄するなら、私に残されるのは「無媒介の知覚」たる「私の現在」のみである。もし私の意識が実践的意識たることを止めるなら、私の意識は「無媒介の過去」を発生せしめている本源の記憶力に回帰する（「私の現在」の第三の規定）。倒立T字図形における横線ＡＢと縦線ＣＩはそれぞれ、倒立円錐図形における平面ＰとＡＢを底面としＳを頂点とする円錐とにほぼ対応している。倒立T字図形において、思弁の領野における「私の現在」が実践の領野における純粋記憶と行

為空間とに変換される二重の派生の過程を辿った後ベルクソンは、倒立円錐図形を掲げつつ、逆に派生元への、「私の現在」への還元を主張しているのである。しかるに『物質と記憶』第二章の第一の記述からわれわれが推察したように、倒立円錐図形による説明が、第二章の三つの仮設を形而上学的に基礎づけていると解される。人格的・個人的記憶の想起の過程も、「過去一般」の再開にせよ、現在への「帰還」にせよ、過去の二つの層の交差によって説明されることになる。最後にこの過程を概括的に辿っておこう。上記の問い1と問い3に対する答えである。

過去の記憶力は、それ自身としては、本源の記憶力と何か別のものだというわけではない。過去の記憶力が派生するのは、実践の領野の出現とともに過去が「閉鎖」されたからにすぎない。物質の側の流れに関しては、「純粋記憶力」が機能して「純粋知覚」を運動性へと綜合し、身構えを介して行為身体に受け渡される。しかるに純粋記憶の側の流れに関しては、実践の領野において過去を閉鎖してしまった以上、過去を再開しないかぎり、当の過去の第二の層が表象として再現されることはない。過去の記憶力の「機能」は第一の層において「性格」として「伏在的に」働くのみである(cf.MM,164)。かくして第一に、形而上学的な基礎だけでは、「純粋」な過去性は現出しない。第二に、「性格」が思弁の領野に属すかぎり、過去の出来事のイマージュとして「個物的」な記憶が意識に現出することはありえない。思弁的意識たる情感において、「潜勢的感覚」の「示唆というソレ独自ノ潜在力」が感得されるとしても、当の「示唆」はせいぜい催眠術師の言葉と同じく、感情として行為を唆すのみであって、表象として再現されることはない。当の示唆は「自動的に演じられる」(MM,178-9)にすぎない。逆に、実践の領野だけでも、個別的な純粋記憶は再現されえない。純粋記憶が再現表象と成って一種の「事物」として、一回性の出来事として、それゆえ時間的に「個物的（個別的）なもの l'individuel 」(MM,172)として現出するのは実践意識に対してのみである。ところが記憶の純粋性は、過去が事物化されて、実践意識が自らにとって過去を無意識化することによって発生するのであった。実践意識は自ら無意識化したものを意識しなければならないことになる。かくして、過去の二つの層のそれぞれに閉じ込められているかぎり、表象として純粋記憶が再現されることはありえない。その再現のためには、二つの層の交差が必要である。二つの倒立円錐図形の関係がその交差を示している。

ベルクソンが最初に提示する倒立円錐図形には断面が描かれていないのであった。純粋記憶の想起の真の起点は「領域」決定以前の「過去一般」の再開である。ベルクソンが「現在の記憶と再認擬き」において「現在の記憶」を「日付」をもたない「過去一般」と規定した(EC,133 et 112,137)のも偶然ではない。「私の現在」の一部である「性格」は、思弁的意識に全面的に現出している。倒立「円錐図形ＳＡＢによって私が表示しているのは、私の記憶力に蓄積された諸々の記憶の全体 la totalité des souvenirs 」である(MM,169)。しかしながら、「過去一般」は想起の起点にすぎず、それだけでは個物的な表象の再現は望めない。それゆえ今度は、断面のない円錐図形は断面の描かれた円錐図形に引き渡される。人間の二類型、二つの理念型はその過程で登場する。この二類型はともども、過去の第二の層に属し、思弁の領野における「並進運動」を欠いている。実践の領野を基礎とする心理学が、「研究の便宜のために代わる代わる身を置く」(MM,187)二類型である。第二章の第一の仮設においてベルクソン自身によって、一回性の出来事が「記憶化された諸々のイマージュのかたちで蓄積していることになる enregistrerait 」(MM,86)と条件法で記されていたのも、「事実」の個物的な残存を実践意識の立場から遡及的に推論しているからである。個物性は想起されてしまった諸記憶の特徴である。人格的・個人的記憶の「絶対的に自己充足」しているという特徴も、第三章では当の記憶をアトムのごとくにみなす連合説の誤りとして批判されている。連合説は、再現表象として実践意識にすでに現出してしまった記憶の存在様態を、想起される以前の記憶の状態に事後的に当てはめているにすぎない(MM,182-4)。しかしながら、思弁の領野を欠いたそうした二つの極限が、逆に通常の想起の際に働いている本源の記憶力を、思弁の領野における「性格」による「示唆」の働きを教えて

くれる。ベルクソンは通常の想起の過程解明に、今度は第二の層たる実践の領野の側から接近することになる。通常の想起が二つの理念型の混合として成立するには、その基層において過去の第一の層が作動している必要がある(MM,173)。

円錐をその極限の頂点Sにまで収縮させるなら「衝動の人」を得る。反対の極限たる底面ABにまで膨張させるなら「夢見る人」を得る。「衝動の人」は、「まったく純粋な現在に生き」、外部から到来する興奮に対して「直に」反応する。「動物の固有性」と同じく、身体の「有用な習慣」だけに従う。いわば「自動機械」である。「夢見る人」は、こうした外的な作用に適応しておらず、「過去において生きる快のために過去に生きる」(MM,170,172)。両者に対して、通常の想起は無数に可能な断面によって特徴づけられる。断面が純粋記憶の発してくる「領域」を表示している。しかしながら、そうした「領域」を検討する段になると、ベルクソンの説明に一種の捩れが生じているように見える。諸記憶の全体はもはや円錐図形SABそのものにではなくて、それぞれの断面上に置かれる。たとえば「私の諸記憶はその全体として、底面AB上に配置」される。頂点Sに位置するのはもはや「身構え」のみである。「前章においてわれわれが予感を与えておいたように」底面ABと頂点Sとの間には、無数の断面が存する(MM,180-1)。断面が存するなら、底面ABと頂点Sとが乖離する。二つの円錐図形は、同じ場面を扱っているわけではない。

三つの地点を考えてみよう。第一は感覚と運動とからなる「私の現在」。第二は、それぞれに過去の記憶の全体が存する諸領域。この諸領域は、底面も含めて各断面によって表示される。第三は人格的・個人的記憶が想起される際の接続地点たる「私の現在」である。「夢見る人」の場合、第一の地点において、感覚と運動との間が「切断」され乖離してしまっている(MM,194-6)。第二の地点に関しては、想定上、底面AB上に人格的・個人的な諸記憶すべてが個物的なものとして配置されている。第三の地点では、当の諸記憶が現在の状況とは無関係に個物的に夢のごとくに再現されて表象される。思弁の領野に属する本源の記憶力の縮約の運動も示唆の働きも機能せず、かつ、「私の現在」の運動面と切り離されている以上、個物的な諸記憶は出来事化した順序のとおりに、互いに「近接」して現出する(MM,190,172,186)。習慣的行為の順序が人格的・個人的記憶の想起の順序を統御することはない(cf.MM,162)。「自転運動」を仮定してみたとて、当の運動は身体に対して伺いを立てる必要もない。しかるに、この理念型には矛盾がある。たしかに、感覚と運動の間に乖離があるからこそ、記憶の再現は夢のごとくであり、物質の側の流れに影響されないだろう。しかしこの乖離はまた、過去の「閉鎖」を理解不可能にし、かつ、当の記憶の移行先の消失を意味する。一方で、運動身体の運動面と切り離されている以上、人格的・個人的記憶の蓄積の初期段階において、行為身体による屈曲効果は一切作用しえず、記憶の事実化も個物化もありえない。他方で、仮に純粋化した記憶が「潜勢的感覚」に移行したとて、身体の運動面との乖離のゆえに、想起の最終段階において、実践意識に現出することはありえない。理論上、個物的な記憶は産出も再現もされえない。「衝動の人」の場合、第一の地点において、感覚と運動とは合着している。したがって今度は、第二の地点も第三の地点も存在すべくもないわけだが、「自転運動」を仮定してみたとて、人格的・個人的記憶が到来しても、「私の現在」における身構えはそれをまったく受け容れないだろう。しかるに、この理念型にも矛盾がある。「衝動の人」は単に習慣に従う自動機械ではない。「意識的な自動機械 automate conscient」(MM,172)である。動物（犬）にも認められるような「身構えについての意識」(MM,87)を有する（「私の現在」の第三の規定）。意識が伴わなければ、行為は行為でなくなってしまう。したがって、「衝動の人」は現在の内に閉じているとしても、「無媒介の過去」からなる「感覚」は具えている。「私の現在」の分析を経た以上、頂点Sは「数学的な点」ではない。最小の円錐である。それでいて、情感的感覚の「効力」は受け付けない。「待機」なしに「直に」反応する。

両者の混合型を考えてみよう。極限に対して一種の程度問題となる。混合

のために必要となるのが、思弁の領野に属する「並進運動」である。この運動が実践の領野に属す「自転運動」と協働する。

第一の地点についてはこう考えられる。「私の現在」における感覚と運動とが、「夢見る人」のように完全に乖離しているわけでも、「衝動の人」のように合着しているわけでもない。感覚と運動との間には通常、或る程度の「弛緩」(MM,7,190,194-5, cf.172)が認められることになる。ところで、「縮約」の記憶力は、「待機することに、さらには何も為さないことに承認を与える」(MM,11-2)。「反応して行為する前に待機し、それで受容した興奮を〔……〕運動機構の多様性の下に調整する機能的能力」(MM,249)である。しかるに、この待機が「無媒介の過去」を発生せしめるのであった。当の待機は本源の記憶力の「現働的な行い」による。したがって「過去一般」の再開は、理念的には、「衝動の人」において始まる。「身体の記憶力」は「瞬間的」ではなくて、「瞬間も同然」なのである(MM,169)。「衝動の人」における「意識」が「待機」を引き延ばすなら、感覚と運動との間にずれを産むことは可能であろう。そうした仕方で本源の記憶力が発動するなら、同時に或る程度は現在を離脱することになる(cf.MM,171-2,190)。われわれは、はやくももういささか「夢見」始めている。記憶力の膨張が始まる。してみると、現在離脱による「過去一般」の再開は、すでに半ば現在への帰還であり、本源の記憶力への回帰でもある。過去の記憶力は「意識と共外延的である」(MM,168)。なるほど現在離脱は、「私の現在」における運動面からの離脱を意味する。しかし、当の離脱による「弛緩」が本源の記憶力の発現によって発生するなら、意識の「現働的な行い」による「待機」が現在離脱を可能にしているなら、その際、過去の記憶力は本源の記憶力に回帰しているわけである。あるいは同じことだが、純粋記憶も「私の現在」の感覚面たる「無媒介の過去」との関係を回復していることだろう。実際、「注意的再認」は身体の運動停止から始まるのであった。「注意的再認」は知覚対象への夢の混合でもある(MM,116)。意識「ソレ独自の現働的行いを通してわれわれは現在から離脱し」、そうやって「過去一般」を再開するのであった。

第三の地点についてはこう考えられる。人格的・個人的記憶は、「夢見る人」のように受け容れ先を持たないわけでもなければ、「衝動の人」のように受け容れを拒否されるわけでもない。「弛緩」の程度に応じて受け容れられる。「待機」による「遅れ」が引き延ばされる分だけ、受け容れの余地ができる。ところで、そのためには純粋記憶の流れは「潜勢的感覚」と成って、物質の側の流れと同様、「身構えを刻印する」必要がある。しかるに身構えの刻印は、人格的・個人的記憶の再現とは別の働きである。ベルクソン自身が『物質と記憶』第二章の第一の仮設の説明箇所ですでに指摘していたわけだが、過去の記憶には「もう一つの用途がある」(MM,90)。過去の記憶を「遁走的イマージュ」として保持することによって、身体習慣を組織するに到る。物質の側の流れによって「同じ状況がたまたま反復」されるのを待つ必要はない(MM,91)。過去の記憶力は、本源の記憶力が物質の流れを縮約して「無媒介の過去」を発生せしめたのと同様、純粋な過去を「縮約」して「潜勢的感覚」における「示唆」の潜在力に「効力」をもたせる。そうやって過去を身構えに引き渡す。ベルクソンが「並進運動」と呼んだ過去の記憶力の運動にほかならない。「記憶力は、自らその全体を丸々経験の前に赴かせ、そうやって行為を目指して、分割されることなく〔……〕縮約する」のであった。過去の記憶力の思弁の領野に属する運動である。過去の記憶力はその基層たる本源の記憶力に回帰して、「私の現在」に帰還する。派生的記憶力の縮約とは、いわば二度目の縮約なのである。純粋記憶は「再び引き締め」られなければならない。今度はそうやって、純粋記憶は「私の現在」の運動面と接続する。

してみると第二の地点は、思弁の領野と実践の領野との、膨張した私の意識と出来事化した人格的・個人的諸記憶とのいわば交差地点に該当する。一方で、身構えを示唆するかぎり、いずれの「領域」も「私の現在」に属する。しかし他方で、それが「或る特定の領域 une certaine région 」であるかぎり、「雲霧」のごとくであっても、少なくとも或る特定の過去の出来事を中心とする(cf.MM,190)。刻印される身構えは、或る特定の身構えである。そ

うでなければ、身体習慣の形成に役立たない。ベルクソンは第二の記述を起こすに当たって、「イマージュ中枢」を複数不定冠詞で表現し、その位置に「いっそう遠い・近い des centres plus ou moins éloignés 」の違いを認めている(MM,145)。倒立円錐図形のいかなる断面においても、「潜勢的感覚」の示唆の働きがありうる(cf.MM,92,169)。実際、人格的・個人的記憶のこうした「潜勢的な状態」においてわれわれは、「適切な身構えを取りつつ」、当の人格的・個人的記憶を受け容れようと「態勢を整える」のであった。われわれが、その記憶に過去性を認めることができるのは、想起されてしまった当の記憶においてではなく、唯一この「本源の潜勢力 virtualité originelle 」(MM,148)においてである。その際はやくももう、身構えに受け容れを打診する「自転運動」は始まっていることだろう。ただし通常は、純粋記憶の側の流れに対して物質の側の流れが、その有用性のゆえに優位に立つ。「雲霧」の示唆によって「身構え」が刻印されることは稀である。それはちょうど、これまでとは違う新たな身体習慣を身につけようとするに等しい。古い習慣が抵抗する(ES,178-81)。したがって、過去の或る特定の領域からの示唆も、通常は身体の第二の屈曲効果によって阻まれる。現在の状況に対処する身構えは主に物質の側の流れから発する。もし示唆を受けたとしても、人格的・個人的記憶が個物的なものとして実践意識に現出するとはかぎらない。多くの場合、第二の層において実践意識に現出するのは、現在の状況に対処する身構えに対応する人格的・個人的記憶のみである。それゆえ「自転運動」のほうは、「過去の記憶力がそれぞれの時間契機の状況へと自らを方向づけて、いっそう有用な面を当の状況に対して提示する」(MM,188)ことになる。

註

(1) ベルクソンからの引用参照箇所は通例に従って略号を用いて著作を示し、その頁数を本文括弧内に記す。引用文中の丸い傍点は原著のイタリックである。他の傍点および〔 〕内は引用者による。

(2) 身体の記憶力に関しては、稿を改めて考察したい。

(3) 「私の現在」については、別稿 ("le corps mouvant et le corps agissant : l'expérience métaphysique du corps dans *Matière et Mémoire* de Bergson" dans *Chemin Faisant*, n°1, 2008／「運動する身体と行為する身体　ベルクソン『物質と記憶』における身体の形而上学的経験」(『道行』第一集、二〇〇八年)）において少し検討したので、小論ではその結論だけを記す。

(4) 病的なデジャヴュ現象ならびに「遁走的イマージュ」については、以下の拙論で少し扱った。「ベルクソンにおける身体習慣形成の可能性」(『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ』No.3 二〇〇〇年)。またベルクソンが、派生的記憶力に関する第二の記述の三つの問いを「遁走的イマージュ」の説明(MM,90-4)の直後に置いていることは注目してよいだろう。本源においては、同じ記憶力が問題になっているのである。

(5) 運動身体と行為身体との綜合については、註(3)に記した拙論で少し扱った。

付記　小論は横浜国立大学における演習のささやかなまとめである。根気よく一緒に考え続けた学生たちに感謝したい。小論は科研費(19652003)の研究成果の一部でもある。